

震災・原発事故による県外避難者自主グループ  
めぐりあいの会  
代表 江本潤子

東日本大震災、福島第一原発の事故の日から2年8か月の月日が経ちました。避難の理由、状況はさまざまであっても、私たちの避難生活も同じように2年8か月がたちました。

愛知県、そして県民の皆様にはたくさんのご支援をいただき、言いつくせないほどの感謝の気持ちを持っております。ありがとうございます。

復旧、復興が少しずつ進んでいるとはいえ、そのスピードは遅く、福島第一原発の状況も決して安心して暮らせるものではありません。私たちの避難生活は長期化を余儀なくされています。

避難先であるこの愛知県において、安心して生活ができるよう、下記のとおり要望いたします。

① 借り上げ住宅、県営、市営住宅の長期にわたる支援について

現在、借り上げ住宅については平成27年3月までの延長となりました、しかしそれは貸主の同意が得られた場合のみとなっており、同意が得られない場合はどうなるのか記されていません。県営住宅については、平成26年3月以降の知らせはまだ届いていません。半年先の住まいがどうなるのかわからない、というのはとても不安です。

避難にあたり、私たちの生活は大変苦しいものとなっています。住宅の支援は生活の大きな支えとなっています。仕事を見つけ働いていても、安定した職に就けない、収入減、被災した地での住宅ローン、家族離れた二重生活など。住宅の支援がなければ安定した生活をする事ができません。

被災した県において住宅の支援が続いている間は、県外に避難した者にも同じ支援がされなければならないはずです。

長期にわたる住宅支援をお願いしたいことと、その必要性について国への働き掛けをしていただきたく要望します。

② 愛知県被災者支援センター（以下、「センター」という）の存続について

センターが私たちの直接の助けになっていることは、言うまでもありません。このように県としてセンターを設置していただいているという事はとても心強いものです。

私たちは被災者同士、少しずつつながりを持つことができるようになりました。行政、支援の情報、必要なものをできるだけ集めて送って下さり、設置当初から交流会を開き、被災者自らの動きを助けて下さっています。そのセンターの地道な活動が今の私たちのつながりをつくるきっかけになりました。支援をして下さる方々と私たちをつないでくれたのもセンターです。

支援センターは、愛知県が避難してきた私たちを支援してくれている、というシンボルでもあると思っています。なくなれば、震災のことは忘れられ、「支援は必要なくなった。」ととらえる人も多いでしょう。そして、避難してきてもいまだ、孤独を感じている多くの人は、その孤独感を一層強めることになるのでは、と心配になります。

まだまだ、支援センターは私たち避難者にとっては必要であり、欠くことのできないものであると

いうことを理解していただき、この先数年間、出来るだけ長く存続していただくことを要望します。

③ 職員の方の対応について

はじめに申し上げた通り、愛知県の皆様には言葉で言いつくせないほどの感謝をしております。職員の方々も誠実な対応をしてくれている方がほとんどです。どうか、今後ともすべての職員の皆様が、県の姿勢に沿って 避難者に寄り添う気持ちで対応を継続頂きたいと思っております。

以 上